

素蓋鳴の声 木枯となりむせぶ 濱本 暁生

青春の日、「青き野の青く炎ゆなり娶りの日」と妻を娶った時の感慨を詠って、あふれる抒情をむき出しにした。年老いて形は変わってはいるが、「素蓋鳴の声」を「木枯」のなかに捉えた作者の心底の抒情は涸れていないのである。

寒 巖 に 奔 流 音 を 鮮 た に す 波多野蟻仗

蛇笏の句に「極寒のちりもとどめず巖ぶすま」の句がある。前書に富士川舟行とある。林火先生は『現代俳句の鑑賞と批評』で、「蛇笏の気性の激しさを遺憾なく示している句である」と評する。蟻仗の作は富士川で得たかどうか知らぬが、何か蛇笏の作品と一対をなすように思える。もし先生が蟻仗のこの句を評したならば、同じ評を与えるような気がしてならない。凍ててそば立っている巖を打つ水勢の激しさを遺憾なく捉えているというべきであろうか。

汝 れ 古 稀 と 鳩 寿 の 母 の 初 便 納 漢の夢

納さんは益々飄飄さを加えてきている。何か仙境に入った感がある。ありのままをありのままに詠って、何ともいえない味を出している。母にとって子供はいつまでも子供である。「お前も今年は七十だよ」とわざわざ書いてよこす母からの初便り、それを読んでいる作者。「そういうえばお袋も九十歳だな」と認識してこの句をなした。生涯妻帯しない納さんにとってかけがえのない母であった。

焼 き を れ り 火 の 国 の 山 大 な る を 久保 龍

作者は久留米出身である。「火の国の山」はとりも直さず隣県の阿蘇である。外輪山に囲まれた高岳・杵島岳・烏帽子岳などの眺望は絶佳である。「焼きをれり」と大上段に構え、「山大なるを」とおおらかに詠い上げている点、まことに阿蘇山の山焼きの大いさを表出して余すところがない。

齒にもろき磯部せんべい鳥雲に 伊藤 京子

「磯部せんべい」は軽くて齒で噛むことのないほどろい。味は淡白で腹にもたれるような氣づかいはない。軽快な句である。しかし軽快さだけで終わっていない。下五の「鳥雲に」がどっしりとこの句を支えて緊めている。磯部せんべいも俳句に詠えるのかとおどろかされた作品である。

地下ばかり歩いて疲る花の後 西村 公鳳

公鳳さんは八十を越しても極めて元氣である。金沢を引き払って東京へ出られてもう十年近くになるうか。都会生活に慣れたとはいっても、通い慣れない道は大変と思えるのである。この句は地下街を歩いての疲ればかりでなく、「花の後」と表出しているだけに、花疲れにも通ずる。さすがに年季の入った作者のふくらみを感じる句である。

桜月夜響き一つに滝二つ 川村 紫陽

紙作りの技術屋である。高速度で回転する抄紙機の音を聞いただけで、その機械の調子、紙の出来具合をただちに判断する耳を持っている。富士山麓が作句のホームグラウンドである。滝は二つの異なった音を響かせているのであろうが、夜陰にとけ込んでいる作者の耳に一つの音となって聴こえている。音には敏感であるべきはずが、臆の中にあつては作者を文芸の世界にさそう。臆夜といわずに「桜月夜」と打ち出して美しい幻想の世界へ誘う。

永かりし春闌なりし鯉五郎 甲斐 虎童

この頃の作者は富士電機製造の役員をしておられた。春闌のさ中にあつても必ず東京句会には出席されていて、団体交渉がこれからあるので、といつてはよく中座していた。この年は恐らく何かの戦術の関係で異常に長引いたのであろう。それがようやく解決してほっとした時、あの時ああして置けばこうはならなかったという自省と批判が、ないまぜになつて、有明海特部のおどけて一種の愛嬌のある魚の鯉五郎を思い出したのであろう。或いは交渉相手の労組幹部の中に鯉五郎を思わせる風貌の男がいたかも知れない。俳諧味の溢れている句だ。

淡島さまへひたひた蝶の磯伝ひ 恩賀とみ子

淡島様は各地にあるが、恩賀さんのことだから加太の淡島神社での作かも知れない。加太は雛流しでも有名である。「ひたひた蝶の」といわれると蝶が形代の役目を負っているように思えてならない。しかも「磯伝ひ」である。作者も磯伝いに歩を運んでいるのである。やさしみのある女性らしい繊細な句だ。

夕顔の妙の純白より夜霧 鹿山 隆濤

澄んでいる眼の持ち主にして初めて、夕顔を「妙の純白」と見ることができるとはなからうか。妙は靈妙の妙である。あやしいまでに優れた純白さ、それは夕顔の持つ幽幻さからきている。夕顔の摩訶不思議の白さから流れよる夜霧に浸り、それを味わっている作者の充足感が、ロダン作のたくましい漢の美に通うような気がしてならない。

稲架の上に雲あそばせて娶る家 猿橋統流子

婚礼前の農家の姿を余すなく捉え得ている。刈り取りを終えて高々と稲架が組まれている。障子もすっかり貼り替えられ、庭もきれいに清掃され、門口には高張り提灯もかけられている。厨には人の出入りがはげしい。部屋には紅白の幔幕が張られている。嫁入り道具も並べら

れ、嫁の輿入れを待つのみである。お目出たい日の天気も上々である。綿雲が悠々と稲架の上を渡って行く、そんな情景である。「雲あそばせて」がよき縁組を祝福しているようである。作者自身の気持ちもはずんでいる。さすがにベテランの味である。

子を生みてより狂へりき麦熟れき 太田 土男

「狂へりき麦熟れき」のたたみかけは見事である。この麦は女手で刈り取らねばならぬ麦である。その女手であるべき人の精神が異常をきたして、この麦はどうするのであるかという述懐が込められている。精神障害（ノイローゼの類であろう）と熟れ麦の結びつきは絶妙な捉え方である。

涼しき灯湖上に頌ち岡谷・諏訪 千賀 静子

諏訪湖周辺の夏の夜は、灯の海となる。湖上には涼み舟の灯も極めて多い。しかしこの句は町の灯をのみ詠っている。諏訪湖の東岸は一衣帯水をなす。町が湖にせまっている。むしろ湖が町に入り込んでいるとさえ思える。山上から見ると岡谷市と上諏訪町の境など判別のしようもない。灯の乏しくなっているあたりで、両方の町の境界を識別するより方法がない。それが

「湖上に頌ち」という表現を引き出したのであろう。

すこやかといふ語 まろやか 蝸牛 下田 稔

稔は本来寡作である。「下田君は一句の完成度を重んずる人だが」「これは下田君の無口と相通じて」と師林火は句集『葭地』の序文でのべている。「響爽かいただきますといふ言葉 草田男」の作品がある。これは子供の尻上がりのびーんとはねた一言が「響爽か」で遺憾なく表出された句である。しかし、稔の「すこやか」という一語の持つ感じをまろやかと表出し、まろやかさを「蝸牛」に連ねているところなど、にくらしいほど俳句にしている。まさに「完成度を重んずる人」の本領発揮といえる作品である。

悦び 二倍 哀しみ 二分 虹 二重 甲斐 遊糸

「妻を娶らば——友へ」の前書のある句である。前書がなくても十分鑑賞に堪え得る句であるが、前書があると今更なこととしくのべる必要はない。七・七・五の破調など一向気にならないほどはずんでいる。ごく親しい刎頭の友への饒であろう。「二……二……二」の積み重ねが、二人となって新しい生活へ踏み出す友の喜びより、むしろそれを祝する作者の喜びを表してい

る。作者の風貌をさえ感じ取れる句だ。「虹二重」も決して淡いはかないものではなく、作者の心象風景の中にしっかりと、永遠に結ばれている。

城閣を入れて花満つ 双眼鏡 富田みのる

双眼鏡に重なる自己の双眸で、ものの見事に万葉の桜を捉えている。万葉の桜を演出するものは一つの城閣である。双眼鏡の中で何が動いた、とかいう句はよく見かける。しかしそれは双眼鏡の機能を説明する域を出ない句が多い。能を演ずる者がその人物になり切ってしまうと、能面を被っているという感じを受けずに、能面に血肉が通う。この双眼鏡もまさに、みのるの眼と一体をなしてしまっているといえる。颯爽たる句だ。

茶畑にうす雪 清瀬過ぎてより 水野 遼

私は仕事の関係で西武池袋線をよく利用する。石神井あたりになると沿線に畑がやや目立ち始める。清瀬になると林や茶畑も散在するようになる。都内では一日持たない淡雪も、清瀬になると日表の畑にも残り、茶畑の上には凍りついて解けないのが薄雪のように残る。「うす雪」と「清瀬」という地名の持つイメージがしっくりと解け合っている。作者が或る日経験したこ

とをそのまま表出したにすぎない作品でありながら、職業柄の彫金の見事な浮き彫りを見せられているようではない。
(松崎鉄之介)

——昭和五十一年

風の子に踏まれて田面かがやける 原田 桃里

冬田の上を走る子らの遠いところで風があがっている。明るい太陽、冷たい風。稲の刈株は子供らに踏まれて田の中へめり込んでいる。稲のひこばえやわずかな冬草が青い。一読明るい風景で心温まる句である。

毛皮脱ぎ羽化しながらに踊りそむ 竹腰千恵子

この句の羽化は蜻蛉でもなく蝶でもない。蛾だ、私は白い大きな蛾とみたい。妖しさが添うからである。ほの暗いホールの片隅でそれも暗色の毛皮を脱いで、まっ白な羽根をうちふるわせるようにしてホールの中央の明るい灯の光圏に踊り入ってゆく光景、泰西の名画の世界、画面の中央だけが明るく周囲は濃紺の構図である。ただし庶民には遠い世界の話である。

満月の雪の畦道帰郷せり 杉本 寛

この作者の故郷は私の住む舞鶴であるが、小学校へあがる前に、父母と共にここを離れている。心なしか彼の望郷の句はほのぼのとして美しい、美しすぎる。この句、雪の積もった田の畦道、人の通った跡を辿ってゆく。折しも満月が輝いて景色はすき透っている。常に喧騒の都会に住む者にとってつくづく父祖の地であることを思う。この作者にとってほんとうの故郷はない。あるのは「故郷に対する憧れの憧れ」というようなものではないだろうか。

裾幾重雪来し山と待てる山 勝亦 年男

山は裾を二重にも三重にも重ねて枯れている。その一番奥の高い山には頂上から肩のあたりまでまっ白な雪をいただいて陽に輝いているが、その主峰の左右の山々はまだ雪の洗礼を受けず眠っている。それらの山は厳しい冬の到来を固唾をのんで待っているのである。決してたのしい期待ではない。のがれられるものなら雪などこないでほしい。しかしどうにものがれようのない運命なら早くきて通りすぎてほしい。打ち重なる山々の姿を的確に捉えている佳句。

分家して天の近くを耕せり 中澤文次郎

分家はできたものの住居の近くには耕す土地はない。住居の近くのわずかな土地は家の直系の長男のものである。やむを得ず分家した二男三男は山へ登る。傾斜地を少しでも平らにして稗や粟や大根を作り、粟を拾い山芋を掘り木樵り人夫をして働くのだろう。「耕して天に至る」は二男三男の仕業かもしれない。

氷海に眠れる町の葬二つ 中台 泰史

作者は北海道常呂町に住む医師。オホーツク海に面したあまり特徴のない小さな町のような。そんな町の同じ日に葬式が二つ重なった。その二つとも作者にいくばくの縁のある葬にちがいない。あるいはそのうちの一つぐらいは作者の患者だったかも知れない。小さな町である。町の人の幾人かは二つの葬式の掛け持ちをしたのではないか。

俄か通夜となりし雛のあはれかな 神谷 梅雄

あまり大きな家ではない。家の誰かが亡くなった。おそらく老人だろう。とりあえず縁戚の者や近所の人々が駆けつけて俄に通夜の準備をする。部屋の間隙の障子ははずされ家財は一間に押し込められる。そのうちの一間には家の娘の雛が美しく飾ってあったが、その雛の灯も消された。今までの部屋の主役が何となく片隅に押しやられ、俄に生彩を失って誰にもかえりみられなくなってしまったのである。「あはれかな」と詠ってそのあわれさはいよいよ深い。

単線沿ひ帯のごとき田耕せり 箱崎マサノ

昔は大きな田で多くの米が穫れたが、鉄道が開通した時分断されてしまった結果、こんな鰻の寝床のような細長い姿になってしまったのである。そんな面倒な田でも過去何十年間父祖よりの手が入っているとすると、ここの一塊の土にも愛着が深まるのである。風景描写に終始していて思いの拡がってゆく作品。

卒業証書受く婚約の指輪して 小黒さく子

しゃれた句である。そして現代の社会風俗をちよつぱり諷刺した薬味の利いた作品となっている。統計的には知らないが、現在の女子高校生の大部分が短大を含めた大学へ進学している

のではないか。それらの女子大生のうちには学生結婚などというものもあるようだから、在学中婚約する者もあるだろう。その約束の指輪をしたまま卒業式に出るなどということはお茶の子だ。現代風俗の一端を描いて妙。

つくしんぼ 紅殻杵も紅に染み 八牧美喜子

小浜線若狭本郷の駅の南の山ふところに鉱泉宿が一軒あるが、その近くに紅殻作りの水車が廻っている。付近の山から掘り出してきた鉱石を臼に入れ、そこへ水を引き入れて搗き砕き、溶けた水を流して沈澱させて紅殻を採る。一句はこの水車の杵を詠って美しい。確かにこの鉱石は赤色だしそれを搗く杵も赤く染まってしまう。水車の周囲には雑草が生え、土筆が生え、たんぽぽ、金鳳華が咲いて春胎蕩の風景である。

四月馬鹿仔猫も通る自動ドア 林 香燿子

この句もしやれた句である。そして馬鹿馬鹿しい句である。読者は一瞬瞞されてしまう。四月馬鹿の所以か。この句、根っからのフィクションではないかと思う。人がマットに乗るとスーッと開く自動ドア、おそらく仔猫が乗ったのでは開くまい。人が仔猫を腕に抱いて通ったのだろうか。あるいは人が通るときそのドアの開いたときを見ずまして、スルスルとその人について通ってしまったのだろうか。ペルシャ猫の仔を抱いた中年夫人を連想しても面白いが、どうせ四月馬鹿なら私は後者として採りたい。

神将の高結ふ髪をのぼる蟻 佐野 美智

田舎の小さな薬師堂の色濃く彩色した小さな塑像であろう。お堂も古び仏像も損傷しているような状態なので蟻も這入りこむのだろう。ただ少し気になるのは、十二神将なれば甲冑をつけている筈である。髪は見えない。しかし神将とのみえればこれは天部に属し、毘沙門天や深沙大将なども神将の部類であるから一概にはいえない。古い仏像の頭に一匹の蟻を見つけた功績は大きい。

雲中菩薩あそべる雲の薄暑かな 宮津 昭彦

宇治平等院での作。平等院鳳凰堂には十六面の壁、扉に阿弥陀如来来迎図が描かれている。この平安時代の着色板絵は現在剥落が甚だしいが、藤原氏盛時の作品として国宝に指定されている。阿弥陀如来には四十八の本願があつて、その一つに「来迎引接願」という大願があ

る。念仏する者の臨終に際して西方十万億土から如來自身が迎えにくるのである。鳳凰堂の來迎図の仏菩薩の雲に乗る姿を、あそんでいると見たのがこの作品である。どうも呑氣な仏さまである。初夏の雲が美しい。

パリ休日手に寧らぎのさくらんぼ 内海 世潮

高野の上綱さまもパリに遊べばこんな叙情味豊かな句をなす。世界各国の人が混在して右往左往しているようなパリの町並も今日は休日、やや町も落ち着いて、いつも喧騒をふりまくパリ人も今日はゆつたりと散歩を楽しんでいるようである。作者も今日一日はゆつくりと凱旋門あたりでも歩いてみようかなどと考えて、ふと皿のさくらんぼを手にとってみたのであらう。その赤い小さな果実も周囲の雰囲気につられて心なしかやすらぎの中にあるらしい。

食ひ倒れの大阪にあり 盆休 松崎鉄之介

「京の着倒れ、大阪の食い倒れ」という。大阪は体裁さえ構わなければいくらでも安直にうまいものが食える。作者も旅行者として今この大阪にいる。たまたま盆休みで幾分ひっそりとしている町並を歩いて、さて何を食おうかと考えているようだ。この作者の素朴な持ち味の遺憾

なく表現されている句である。なお「食ひ倒れの」は大阪の枕言葉の働きをしているとも見える。

流れ星群山あれど伊吹屹つ 金子無患子
かへりみて妻がゐるなり 白芙蓉 同

これらの特別作品が「濱」に発表された時には作者金子無患子はもうこの世にいなかった。彼は自分の急死を予感したかのようにこの作品のために全部の力を傾注し、絞りつくした感がある。筆者も伊吹山が好きで新幹線に乗るときは、富士山を見ないでも伊吹は見たいと心掛けている。あの大きくてやわらかい姿、とに角巍然としている。付近の群小の山を睥睨して立っている。「屹つ」という言葉が適切である。第二句目の「かへりみて」の句を見て、彼の死への予感を思うのは思い過ごしだらうか。黄昏ときだらう、夕方のうす暗がり立ってふとうしるを振り返ってみる。そこにほのぼのと夫人が静かに立っている、その横には白い芙蓉の花が咲いている。淡い夕月が出ていてもよい、伊東深水の絵だ。

秋花の何花欠けしといふべしや 田中 螺石

無患子追悼句。追悼というより、無患子を失ったときのこの作者の感慨の極みのつぶやきといふべきか。秋の花といえは菊、白・黄・うす紅・臘脂など色とりどりに咲く菊、その外桔梗、女郎花、竜胆などここに飾る花の種類はたくさんある。しかし何か淋しい、何か一つ足りないものがあつて満たされない。さて何が不足しているのだろうか。作者は一人秋の夜のその欠けたものへの思いを籠めて淋しさとたたかっている。やがてそれは悲しさにつながる思いである。

夜 長さの 厠 三たびよ 避難 宿 近藤 一鴻

「長良川堤防決壊、輪中家屋浸水四日に及ぶ小学校の避難先より三青居へ再避難」と前書がある。この年台風十七号の被害によるものである。筆者もその直後機を得て見舞に駆けつけたが、聞きしに勝る大惨状であつた。刻々増えてくる水に追われて近くの高台の小学校へ避難したが、水が引いても直ちに帰つて住めるような状態ではない。作者は句友の岩井三青居へ再避難して昼間は自家の復旧作業にたずさわることになるのである。折しも台風通過後のうすら冷たい夜長の季節、避難宿の主人は気心の知れた古くからの友人であるとしても所詮は他所の家である。夜半厠へ行くのもやはり気が重いが、これも生理的現象止むを得ない。それが一夜に三たびとはいよいよよわびしい。

(猿橋統流子)

— 昭和五十二年

追 羽 子 に 高 野 の 杉 の 高 こ だ ま 市川 翠峯

年末年始、作者は高野山を訪れている。雪も積む山上の聖地で迎える新春は、身も心も引き締まるものであろう。そこで出会つた羽子つきの状景に、作者の心が吸いよせられ、寒さも忘れ恍惚と見える。舞い上がる羽子の白さと杉木立にひびく羽子の音の印象が、鮮明に句にうつしとられて、新春を迎えた山上の町の、引き締まつた雰囲気を彷彿とさせてくれる。

襖 絵 の 鶴 に 手 抃 げ 春 著 の 子 大串 章

襖に描かれた鶴の姿態に向かつて、それを生きた仲間のごとく感じ、その翔ぶ姿を真似するように袖をひろげている、幼い子供の春著姿がいきいきと描かれている。新春のめでたさにあふれた句である。幼い子供の気持ちに素直に入つてゆける作者の、汚れない初々しい心持ちが生んだ佳句といえよう。大串章の吾子俳句は有名であるが、彼の抒情の根源にあるふるさとより肉親への指向の線上に、また一句を加えたものといえる。何よりもその大らかな初々しさに賛同する。

海女の撒くどんどの灰の鯛になれ

原田 桃里

愛知県碧南市に住む作者は、三河の風物行事を詠って余念がない。掲出の句は、南に海を持つ碧南の地の明るさのびやかさを描出して佳品。海女漁村のどんど焼きに行き遭ったことはいが、豊漁を祈って海に灰を撒くのであろう。昔から魚の王様といわれている鯛を焦点に据えて、目出度き限りないものとなった。民俗行事の宝庫といわれる三河に慣れた作者は、行事を行っている人達とすぐに同化する心を持つ。

棒のごとサムサノナツを人ありく

山口 茶梅

前書に「宮沢賢治の雨ニモマケズの詩の中のサムサノナツが現実には襲ひ、農民は五割減収で表情が暗い」とあり、作者の存在を強く印象づけた句である。作者は花巻の人、同郷の宮沢賢治に私淑してこの句を成したが、決して賢治をなぞっていないで、作者の実感を詠んでいる。「棒のごと」の放心の態、なまなましい描出である。病身を自愛されて健吟されることを期待したい。

花万朶白鳩のごとわれ受洗

横溝 賢介

林火先生の賞讃を浴びた句である。作者まだ二十代、しかも入信という生涯を劃するよろこびを詠んだ句である。作者は人生に対し真摯、敬虔であり、その作者にしてはじめて掲出の句が生まれたものと納得できる。自分を白鳩にたとえる手放しの瑞々しさと可憐さの生まれるのは、やはり二十代の人の抒情であらう。

四月馬鹿癒えてけふより身障者

大川つとむ

「第一級身体障害者となる」の前書がある。作者は慢性腎臓炎に悩まされ続けたが、この年二月それが急速に悪化し、生死の境を彷徨した末、遂に人工腎臓による血液透析療法に踏み切り、ようやく生を取り戻した。これから先の一生は、必ず一週三回、一回五時間かかる透析により全身の血液を浄化するのであって、この四月一日から第一級身障者の認定を受けたのである。この間の事情を知るときこの「四月馬鹿」の句が、いかに重い意味をもって読者にのしかかるか。これほどの「四月馬鹿」の句をかつて目にしたことはない。

花曇ひと夜月ある雲の底 青木 静江

八十歳を過ぎた作者はいつお会いしてもしゃんとしておられ、しかも艶やかさが滲み出てくるようで、女性の晩年をうらやましく思うことがある。さくらといってもその華麗さを詠うのではなく、薄雲を透いてくるほのかな月光の下の花の底びかるのを詠って見事。さすがに艶ある娘の作と感服した。句そのものが作者の艶あるこころの張りを描き出している。益々のご健在をいのりたい。

花冷えの大沢崩天に照る 小倉 岳香

作者は昭和五十三年四月二十四日に急逝された。昭和五十二年は句集出版を期して大変な健吟振りであった。富士支部の牽引車として富士山に執する気持ちも強かったであろう。大沢崩れは富士頂上から真西に深くえぐれた沢で、幅五百メートル、深さ百二十メートル、現在も崩壊は続いている。これを花冷えの季感で捉えて、気魄ゆたかに「天に照る」といい切ったあたり、堅実重厚な作風そのままに、天へ抜けたような感じがする。

風の息わが息と合ふ五月来ぬ 溝口 青於

幽明を異にした作者の句が続くが、この年七月十九日の他界であった。遺句集『溝口青於全句集』のあとがきで村上一葉子が、掲出の句について、「この風の息に現れた作者の呼吸は大きくはないけれども、ゆっくりとした充足感に満ちていて、平安な青於さんの顔が浮かんできではつとする作品である」と述べているが、この会得の境地に安んじてご冥福あらんことを祈る次第である。

かすみつつ国中を行く風流傘 金子 篤子

この句は^{おおやまと}大和神社で四月一日に行われる、春季大祭チャンチャン祭における取材ときいている。大和神社は国鉄桜井線長柄駅の南東にある延喜式内の古社である。「風流傘」は祭礼などの行装に用いる花飾りなどの装飾を施した傘をいう。この句のうまいところは「かすみつつ国中を行く」の表現にあると思われる。国中はくんなくと読む。本来大和盆地を呼ぶ言葉として使われたものであろう。今でも大和の南方吉野郡の人びとは、「くんなかへ行ってくる」というそうである。日本土着の地主神が、日本中を罷り通ってゆくような感じにさそわれ、神代

にかえったような、のどかき、大らかさに引きこまれる。

牡丹百株 母百歳の歩に競ふ 久保 草風

「百歳の母を詠うのは君の特権」とは林火先生がつねづね作者にいわれる言葉と聞いているが、掲出の句は気品と豪華さで花の王者といわれる牡丹百株を、母の歩みの辺に揺れしめて、母を祝福する目出たさの極みを描き出した。残念ながら昭和五十三年臘月、母上は玉楼の中の人となられたと聞く。

海中の魚と遊びし髪洗ふ 山上カヨ子

作者はスポーツウーマンの大柄な体格の上に、よくもかく柔軟な脳味噌が載っていると想像されるように、その発想の自在さが大きな特色となっている。掲出の句はメルヘンの世界に遊んだ句であるが、海から上がったのは人魚と思いきや、黒髪を洗っている女身であつたあたり、俳句の骨法が身についていて面白く読ませてくれる。

子ら汗して父となり母となりゆくや 三浦 紀水

この年娘さんたちが嫁がれて二人きりになられたことが、静かな自在の境地を誘ったのか、人生を見据えたようなしみじみとした佳句が多かった。掲出の句には自分の汗してきた人生経験をふまえて、子供等の行く末を温かく見守っている肉親の情が、さりげなく詠まれて好感がもてる。人温のつたわってくる佳句である。

空港ににつぼんの虹濃かりけり 町田しげき

古稀を間近にした人とは思えぬ健吟をつづけているのがこの作者である。瑞々しい抒情と生来の人なつこさは、いくつになっても衰えを見せない。掲出の句は、細かな抒情の描出を揚棄して、骨太く大胆に詠まれているが、作者持ち前の大らかなロマンの香りが放射するようである。「濃かりけり」という詠嘆に千鈞の重みがある。年輩の作者でなければなし得ぬ佳句と思う。

母盛つて飯の大盛り雲の峰 伊奈 秀典

この句には幼き日のように、母に大盛りに飯を盛ってもらつて甘えている作者がいるし、母上もそのことが楽しみなのであらう。幼き日の如く母上健在という気持ちだが、雲の峰という季語を選ばしめ、大盛りの飯にもつながっている。この表現はやはり三十代作家であるとの思いが強い。

夕 簾 村 を 貫 く 道 に 僧 杉 本 寛

お盆の風景であらうか。魂迎えの用意もすっかり済み、打水をされた道を一人の僧がくる。その道は村を一直線に貫いている。というような情景が想像されるが、景の切り取り方がいかにもすかつとしていて、作者らしいと思う。からつとした性格そのものの、饒舌の片鱗もなく俳句的である。しかしこの句のうしろには確かにこの作者がいる。村を貫く道の彼方に、作者は何を見ているのであらうか。

灯のなきがわが家と思ふ葛月夜 佐野 美智

作者の現住所は瀬谷区阿久和町、横浜駅から相模鉄道で三十分もかかる。いつか一緒に吟行した帰りに、遅くなるとタクシーがない、歩くと何十分もかかるのだが、わが家は一人住まいで灯が見えない、と聞いたことがある。その思いがそのまま句にされたのがこの句である。「葛月夜」という美の世界に誘われている。地味な作風を身上とするこの作家の、作らんとしている美の世界が想像されるような気がする。

荒 船 山 は 神 の 月 台 上 り 月 荒 井 正 隆

作者の住む埼玉県では、すこし歩けば荒船山の岩のかたまりのような、頂きの平らな山容を望むことは容易であらう。満月近く月光に照るこの山を「神の月台」と形容した。木曾御嶽登山講先達を祖とする家の生まれの作者は、山嶽に対する憧憬が強い。格調の高いその句風、完全主義をめざすその指向も、そこに由来するのであらうか。掲出の句は満ちてゆく上り月を配して、気魄があると思う。

野菊の上雲中の富士疑はず 鳴戸 海峡

秋の箱根の鍛錬会において大好評を博した句である。特に関西の人々には眼近に富士山を望めるといふ期待があつたにちがいないが、この日は一面の濃い雲と霧で、その山容は望むべくもなかった。その夜の句会でこの句が一同を驚かしたのである。作者の情が、霧を通して見えない富士の景と融合したものととして、特筆に値する。

木の葉散る濁世を脱くるごとくなり 村越 化石

この年の「濱」九月号に荒井正隆が書いている言葉を引用したい。「ここにはもはや境涯に對する懷疑も叫びも消えてない。永い遍歴と苦悩という禱りのはて、今日あるごとくあらしめてくれた大いなるものの恩寵、そこへ導いてくれた師恩、あらゆるものへの有難さに満たされた息づかいがある。これこそは師弟がたずさえて具現しえた優曇華のように稀有なありようであり、文芸というものの果した現代の奇蹟であるという他はない」作者の到達しえた安らかな諦念の世界、散る木の葉のいのちに息を合わせうる境地、尊いと感じ入るのである。

(甲斐虎童)

昭和五十三年

初明り 嬉々と節穴多き戸よ 松崎鉄之介

自註『松崎鉄之介集』のあとがきに「文学は飾るものだというのが、私にはどうもそれが出来ない。今後とも恐らく出来ないだろう」と書いているが、そこに鉄之介俳句の真骨頂がある。「嬉々と」の形容が巧まずして「初明り」の寒い中にほのほのと東天にさしてくる心改まる元日の曙光を洩らす「節穴多き戸」を描いてあまりある。まさに鉄之介の世界である。

忿怒仏 忿怒を柿に托しけり 宮津 昭彦

転動することについてしかその風土を自分のものとして休むことなく成長し続ける作者には常に畏敬の念を抱いている。忿怒仏の容貌と真つ赤に熟れた柿とのつながりは笑いの中のウィットさえ感じさせられる。この辺りに新しい展開を志している作者の意欲が十二分にうかがわれる。

冬の日や遠流のごとくひとり座し 田口 俊子

この句を読んでゆくりなくも林火先生の「女人遠流の女人を読めりさくら散る」を想起した。高遠観桜の折の御作である。私も故馬込子や虎童とともに先生にお供したのであるが、遠流は流罪の中でもっとも重刑ときかされただけに、桜満開の季でありながら寒々としたものを強く感じたことを覚えている。会うたびに多忙を聞かされる作者にこういう時間もあるのかとも思われたが、冬の日やしみじみとしたぬくもりが孤愁を救っている。

凍晴を障子もつとも知れるなり 村越 化石

今更作者や作品について触れる要もあるまい。益々自由闊達に詠い、しかもその内容を一段一段と高めている。実に立派である。

竹馬のさみしき顔や塀を過ぐ 大串 章

林火先生は句集『朝の舟』の序に「望郷こそ大串君が俳句に求めた青春のはけぐちであった

のだ」といわれておられるが、「竹馬」もまた少年時代の追憶と重なる望郷一連の作品である。「さみしき顔」が何ともいえない共感を呼びおこす。佳吟ではあるが新しい道を志す作者にとつては決して満足とはいえないであろう。俳壇の新しい星となる日のために切に自愛研鑽を祈りたい。

蛸提げて寒暮を解かぬ頬かむり 堀田 政弘

作者の句はその日頃の真摯な態度がそのまま表現されている。三浦半島という場をもち、稔・博・石映など多くの良き友をもっていることが今日の開花をみたのであろう。「寒暮を解かぬ頬かむり」に半島に押しよせてくる都会風に頑なに抗う漁師気質を見る思いがした。また、それを見抜いた作者の心の昂りを強く感じさせられた句である。

累なりて海風も息を熱くせり 森田 博

芭蕉の「いきながら一つに冰る海風かな」とは対照的な句である。私はいずれもその真偽は知らない。しかしよくああいふ異様な生物を一番最初に食べた人間はどんな人間だろうと感心していた感懐からいうと、あの海風が重なりあっていると考えるだけで、こちらまで身内が熱

くなるような気持ちがある。「息を熱くせり」もさもありなんと思われるのである。発想の奔放さと把握の確かさに掲出の句を推す。

縷々つづる手紙のごとく海に雪 井上三千女

縷は糸である。こまごまと説きつづる手紙は何を訴えているのであろうか。暗い海に絶え間なく降りつづく雪。中年の哀歎がしみじみと感じられる句である。

稼ぎ妻戻る一束の葱のぞかせ 茂里 正治

マラソンで何時の間にか上位集団にいるという人が毎回必ずいる。たとえて悪いが作者はそういう人である。その背後にしっかりと生活があり、その基盤に関西の風土があるからであらうか。自分自身の息づかいをもっている強みが作者にはある。それは単なる知識から生まれるものではない。お母さんを始めとし、奥さん、子供さんに対する温かい思いやりと真摯な誠実さから出発している。そしてそれらが如何なる対象に向かっても失われないうちに正治俳句の真髓がある。一束の葱に共稼ぎ(?)の奥さんの心の襷を見、その奥さんへの愛情とともに深い感謝の心がこもっている作品である。

つぶやきのごと白髪殖ゆ冬籠 勝又寿々子

正治と同じようにその初学の頃から一貫した真摯な態度がこの年の成果となり、数多くの秀句を生んだ作者である。耐えるということ、執するということの大切さを教えてくれた作者である。小さくつぶつこぼす独り言。数々の哀歎が胸を横切るであらう冬籠り。それを「白髪殖ゆ」とうけとめたところ、さすが女性であると感じさせられた句である。

村の木へ離郷最後の雪礫 中田 勘一

この句、如何なる理由の離郷かわからないが、決して幸せな理由ではあるまい。万感の思いをこめて村の象徴とも思われる木へ投げつける雪礫がどんなに鋭いか、切々と感じられる。作者は大川学校の優等生、写真に徹し具象力が培われてきて危なげない。この数年の活躍、目をみはらすものがある。

白紙一枚飛んで二月の土覚ます 西村 公鳳

この「土」はまさに二月の土でなければならぬ。長く住まれた金沢ではなく、武蔵野の二月である。それも仮寓ではなく常住の武蔵野の原をしつかりと見据えておられる。舞い落ちた一枚の白紙に、春を呼び覚まされた二月の土に作者の益々の健康と長寿を自ら誇っておられる句である。めでたいことである。

さくら散り昨日のごとく今日終る

小松原みや子

「昨日のごとく今日終る」は平凡な主婦の毎日の生活が詠われている。しかし、その「平凡」が人間にとって、人生にとって大切なのである。作者の句集『花信』の序に林火先生も「平凡を平凡と肯定する心の据え方に共鳴を覚えている」といつておられるが、それをあくまで追求して努力してゆく作者の念が一句に凝集されている。「さくら散り」に己が心のゆらぎを託して、平凡を非凡に変えてあまりある句である。

トランペット吹けり立夏の波際に

横溝 賢介

この正月、新年句会後の席で入信の動機を語った作者の言葉、態度は晴れやかで好ましかった。現在の彼の信仰はもうその動機を云々する要はないほど確固たるものとみた。信仰を基盤

に、なお若々しい感覚かつ美しい感情が常に新鮮に、常にあなたかく私たちの心に囁きかけてくる。「トランペット」には若さにロマン、感傷がプラスされていて羨ましい限りの句である。

白牡丹 齢重ぬを富貴とも

松岡 里江

賢介作品が若さを誇示しているなら、里江作品には豊かな老いの華やきが溢れていて楽しい。危なっかしさのない安心感が満ち満ちている。「齢重ぬを富貴とも」と客観的でなく自己の日頃の存念を堂々と詠いあげているところに、一段と高い格調ある句としている。

雲海の上に恋する深山蝶

羽部 洞然

群がって大海原のように見える雲。その上を舞うごとく、飛ぶごとく恋を語りあうかのような深山蝶。夢幻の世界である。作者独自の飄逸味に加えて夢があつて楽しい。喜寿をもうすぐ迎えられる作者はいよいよ初心を堅持され、ますます句境を深めておられることはまことに嬉しい。

田植にしんきしと噛み喜雨ききるたり

中戸川朝人

「田植にしん」は会津地方独特の農繁期の保存食である。作者は焼きものの先輩粟飯原孝臣と連れだつて会津の民衆「本郷窯」を訪ねてこれを知ったという。本郷窯で田植にしん用のにしん鉢を焼いているのである。「きしと噛み」とはいい得て妙、噛みしめると油がにじみでてくるような身欠きにしんの感じがよく表現されている。

あけぼのの権行に朴弁ゆるぶ

吉野 義子

高野の作である。作者は神出鬼没、よく旅をし、旅にとらわれない佳句をものしている。朴の開花について私は林火先生の『私の俳句歳時記』によつてご教示を頂いたが、作者もおそらく白みゆく暁の氣の中にゆるむ九弁の朴の花を見ながら、先生の名文が頭を横切ったことである。内海有昭上綱の朗々たる読経が聞こえてくるような、しつとりと落ち着いた観照の佳吟である。

存分にシャワー浴び今日もう出でず

中川 美亀

この句は作者の従来作品とは違った傾向を示している。同人賞受賞の言葉に「賞の大きさに追いつくのはただこれからの努力で埋めてゆく外ない」といつておられるが、その努力が実つてこの一句、一段と句境を深めてこられた一つの証左であると私はみたい。「存分に」が作者の決意を表していさぎよい。

日焼してみちのくびとの太背骨

山口 茶梅

「濱」において麦青・和賀流の流れをくむみちのく風土の系譜の俊英で、病弱と聞いたが、なかなか句の上では強靱なものをもっている。まさに「みちのく人の太背骨」であろう。とに角健康を切に祈つて、繚乱たる濱俳句の開花にその力をかりたい。

脚長き銀の燭台夜の秋

榎原希伊子

独自の詩才を有つ作者である。「脚長き銀の燭台」とは洒落たものを見つけたものである。

瀟洒なホテルかレストランの一室を想像させられる。そしてそれは夏の明るさと秋のさわやかさが織りまざった夜の秋にふさわしい。登場人物も目に浮かぶような句である。

打つ箔のうすくすずしく蒼むかな 栗飯原孝臣

下田稔とともに近江に執した作者は、次第にその対象をひろげ、町や村に残る年中行事を通じて土地に親炙し、その土地人になりきった。掲出の句、ピントがよくきまっている。打つ瞬間の微妙な時間の経過と箔の変化を掬いとったその力は素晴らしい。作者の一面というか新しい試行というか、近江に執して、そして離れた成果であらう。

出羽かけて残さず星の出し夜寒 小谷部東吾

みちのく鍛錬会賞作品である。林火先生の「毛穴のひらく思いのする句だ。暗黒の空に無数の星がきらめく。そしてその先は出羽。参加者大方に穴原をなつかしい土地にしてくれた句といえようか」とのご高批があるが、まさにその通りである。固有名詞の句はむずかしいが、この「出羽」は動かない。作者の力である。

(杉本 寛)

新濱百句

昭和五十四年～六十年